法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-05

研究アプローチ活動報告

TANAKA, Yuko / OGUCHI, Masashi / ABIKO, Shin / WANG, Min / KREINER, Josef / 田中, 優子 / クライナー, ヨーゼフ / 王, 敏 / 安孫子, 信 / 小口, 雅史

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
337
(終了ページ / End Page)
377
(発行年 / Year)
2014-03-31

研究アプローチ活動報告

研究アプローチ① 田中　優子 … 337
研究アプローチ② ﾖｰｾﾞﾌ･ｸﾗｲﾅｰ … 349
研究アプローチ③ 王　　敏 … 354
研究アプローチ④ 安孫子　信 … 365
電子図書館の構築 小口　雅史 … 373

研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷－古代から近世へ」

アプローチ・リーダー：田中　優子

はじめに

2012 年度の研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷－古代から近世へ」のメンバー構成は、昨年度と同じである。なお国際日本学インスティテュートのポストドクター（リサーチアシスタントならびに国際日本学研究所客員学術研究員）と博士後期課程の学生（国際日本学研究所学術研究員）も昨年度同様、研究メンバーとして様々な補助と研究に携わってもらった。

2012 年度の打ち合わせ会議は 5 月 19 日（土）におこなった。

2011 年度の研究活動は、「国難と日本意識」「対外意識と日本意識」であった。2012 年度には、そこに「みちのくワークショップ」を取り入れ、東北と日本の関係も研究対象にすることとした。さらに、今まで購入してきた地図類を有効に活用する展覧会を兼ねたシンポジウム「江戸人の考えた日本の姿―世界の中の自分たち―」を開催すること、そして、来年度に備えて近代のテーマについても準備を重ねてゆくことを決めた。

研究会

2012 年度第 1 回研究会は、6 月 30 日（土）に開催された春名展生氏（中京大学国際教養学部非常勤講師、同社会科学研究所特任研究員）の『「国家ノ生存競争」と「衆民政」―小野塚喜平次の対外観と日本』である。

吉野作造が「第一の恩人」と呼ぶ小野塚喜平次は、「衆民主義」の首唱者として、また「日本政治学史の源流」に位置する人物として知られる。しかし看過されがちなのは、小野塚が国際関係を学問的な考察の射程に取り込んだ点である。本報告は、小野塚がどのように国際関係の制約と各国家の裁量を割り出したのかを探り、そこに一つの「日本意識」を見出す試みであった。

大戦後の日本は失業、就職難、そして移民問題などにより、それまでになく「過剰人口」が強く意識された。ときの陸軍次官が新国家は「国防上、資源上、人口問題上大なる貢献をなすに至る」と論じている。つまり当時の日本では国際連盟を前提とした「国際政治」よりも「国家ノ生存競争」が国際関係の理

論化として説得力を持ったであろう。とくに「十五年戦争」期に入ると、後者にまつわる小野塚の知見が実践に活きるようになる。小野塚が日露戦争の頃に提起した「国家ノ生存競争」と「膨脹政策」は、意外なまでに息の長い「対外意識」および「日本意識」であった。

次に9月21日（金）、予定どおり「みちのくワークショップ近世篇『東北文学と日本意識』」を開催した。

横山泰子「只野真葛と平尾魯仙」は、東北在住の文人の例として、只野真葛と平尾魯仙をとりあげた。真葛は江戸出身だが仙台に嫁し、故郷を思いながら『奥州ばなし』や『独考』を書いた。江戸では聞かれないものとして東北の奇談を集めようとする著者の視点が感じられる。『独考』には、我国人という著者の帰属意識が明らかに認められる。『独考』は個性の強い知識人の著作であるが、近世社会における女性の日本意識の一例として位置づけることができる。「女性の日本意識」という問題も、今後の課題として挙げられよう。魯仙は弘前の国学者・画人で、江戸に憧れながら故郷にとどまり、北辺で大局を見ようとした人物である。開港直後の箱館に渡って異国人の風俗を絵と文章で記した『洋夷茗話』や、地元の奇談集『谷の響』などの著作がある。異国人に接した魯仙は、率直に自他の違いを書き記している。箱館の経験が彼の皇国意識を高め、平田国学へ傾倒する契機になったと思われる。

田中優子は「近世の蝦夷イメージ」を語った。建部綾足『本朝水滸伝』(1773)をめぐって、犯罪者同盟たる『水滸伝』の構造を借りながら、蝦夷をどのように描いたかを述べた。この作品は古代を借りて中央政権側と亡命者側に分け、さらに外側に位置づけられる「まつろわぬ者たち」を描いたのである。さらにそれから時を経て、恋川春町の黄表紙『悦贔屓蝦夷押領』（1788）が刊行される。これは義経伝説に基づいているが、同時に田沼時代のロシア（赤蝦夷）を含む蝦夷調査の実態を反映している。ここでは、「蝦夷」が中国人、ロシア人を中心とする外国人イメージの集積場になっている。さらに、作者不明の『織出蝦夷錦』を取り上げた。この作品では実際の蝦夷一揆や島原一揆が描かれ、辺境の一揆に加担する平賀源内が、義経伝説の新たな系譜として書かれた。さらに、菅江真澄のアイヌ記録、『もののけ姫』のアイヌイメージに言及しながら、

近世の東北を、蝦夷領域の移動との関係で言及した。近世の蝦夷はすでに北限として北海道から満州、ロシアまで含むものであり、東北は蝦夷の途中経過だったのである。

小林ふみ子は「みちのくからみる狂歌・狂詩文」と題して、狂歌や狂詩文の作品を題材に「みちのく」の文化的異質さは「日本」にとって多様性なのか、他者性なのかを問題提起した。奥州訛りは、歌舞伎・浄瑠璃などの世界で「他者」として滑稽さの演出の手段となり、現実世界で（なかば芸能者であった）飴売りが「奥州」「仙台」の出自と訛りを滑稽な芸として前面に出す現象を生み、それを「華人」「仙人」という他者として捉える狂詩文『飴売土平伝』の表現を作り出した。また流行が東北地方にも及んだ狂歌の世界では、当地の狂歌人が「みちのく人」としての自身のアイデンティティを狂名や狂歌に托して表現しようとし、伝統的な東北の歌枕やそれにちなんだ古歌を用いて狂歌を詠んだ。さらに伝統的な和歌の規範に飽きたらず、それへの違和感や新たな土地の風景を詠もうという試みも見られた。それは、他者として扱われがちで、実際に他者たらざるを得なかった「みちのく」の人々が、自らを他者化する規範としての「日本」に依拠しながらも、そこからの離脱を模索する姿としても捉えられるのではないか、と論じた。

討議では、慶応大学の津田眞弓によって、3.11 以後の東北の状況と、芭蕉やセバスチアン・ビスカイノがたどったルートとを重ね合わせる報告がおこなわれた。これによって、歴史的な東北と今の東北とが立体的に見えて来た。さらに東京大学の大木康氏によって、危機の時代に出現する中国の華夷秩序、そのもととなる朱子学、そして『水滸伝』後半の体制への帰順が影響していることが、指摘された。華夷秩序から出て来る都鄙概念も指摘され、文化の様式と言語化が都中心に行われるため、そこでは鄙からの発信が抑圧されることも分かってきた。蝦夷概念も問題となった。華夷の「夷」である蝦夷領域は、もともと関東を含むものであり、古代から次第に東北に移動し、近世では北海道、千島列島、ロシアまで含むようになったことが明らかにされ、華夷秩序の空間的移動が日本意識を変化させていることが見えてきた。

9 月 22 日（土）の第 2 回研究会には、前島志保法政大学経営学部専任講師と、

衣笠正晃法政大学国際文化学部教授を迎えた。

前島志保は「戦間期『主婦之友』における「家庭」と「日本／国家」を発表した。戦前の『主婦之友』は、「中流層における主婦の形成」や「戦時協力批判」の文脈で語られることが少なくなかった。しかし近年の調査では、同誌の読者は中流女性だけではなく、幅広い層の男女に渡っていたことが判明している。また、初期の同誌は国家／日本への言及が少ない。そこで、本発表では、大正期から昭和初期にかけての『主婦之友』における家庭に関する言説を取り上げ、同誌の人気の理由の一端を内容面から再考するとともに、そこにおける「家庭」と「国家／日本」との結び付きがどのように変化していったのかを、歴史的・社会的な状況の変化や主宰者・石川武美の思想的背景にも留意しながら、考察した。

衣笠正晃は「1910 ～ 1920 年代の国文学」について語った。国文学研究史において 1910 年代から 20 年代（大正期）は国文学研究が制度的に完成した転換期であり、日本主義イデオロギーの基盤となった 15 年戦争期のあいだにあって、谷間の時期と捉えられてきた。こうした常識に対し本発表では、アカデミアの中心であった東京帝国大学を主な対象に大正期の国文学研究の動向を分析し、意義の再検討をおこなった。

最初に注目するのは、国文学研究における世界文学的な関心の高まりである。東京帝大文科大学のカリキュラム改革により、外国語（2 か国語以上）の試験合格と自由選択科目の履修が求められた結果、国文学専攻者も西洋文学から強く影響されるようになる。文献学としての国文学という基本理念が揺らぎ、文学研究における文献学と批評の方法論的対立が意識されるようになった。

総括すれば、大正期国文学は 1930 年代、40 年代における国文学の隆盛の基礎を作ったと考えられる。文献学と鑑賞批評との方法論的対立、そのなかで文学への主体的アプローチの模索は、のちの「日本精神」「日本的なるもの」の抽出へとつながる。

第 3 回研究会として、「みちのく」のテーマと近代研究の準備を兼ねて、10 月 12 日（金）に人見千佐子氏（法政大学国際日本学研究所学術研究員）によ

る「イーハトーヴと賢治の日本･国際意識―浮世絵の観点から―」を開催した。

宮澤賢治は国を問わず様々な言葉や地域、文化が混在したイーハトーヴという世界を創造した。その意味で日本と海外の間に境界線をひくということから一番遠い作家である。しかし賢治は仙台や東京で浮世絵を買い集め、その収集数は三千枚から四千枚とも言われている。上野で展覧会があると聞けば展示が入れ替わる度に会場に足を運ぶ、それだけ浮世絵に魅せられていたのである。

浮世絵に関する評論『浮世絵版画の話』には賢治の浮世絵観が色濃くうつしだされている。浮世絵のもつ単純性、韻律、神秘性、工芸美、そして安価であることはもっとも賢治をひきつけた。この視点の中には同時代の海外収集家達のものと共通するものがある。浮世絵に関する海外の評論に触れること、そして国の境界を超えて芸術について考えることは、結果的に外側からみた日本の芸術という視点を賢治に与えたのである。童話作品中、形容の目的や、外国と並べて単なる一つの国として扱う以外は、賢治は「日本」という単語を使わなかった。しかし、浮世絵展覧会の為に上京した 1928 年、東京をモチーフにして書いた多くの詩には「日本」という単語が合計六回使われ、その多くが海外諸国に対する日本、国としての日本という意味を含んでいる。賢治は童話を創作するうえで、日本と海外との境界線を明確にすることはなかったが、この浮世絵展覧会のための上京のタイミングでそういった意識は一度に賢治の中に流れ込んできたのではないだろうか。つまり西欧由来の近代文明に流されつつあった東京の姿と、海外諸国によって新たにその価値を見出されていた、海外に誇れる日本芸術、浮世絵を同時に認識した時、日本という国の相対化がおこなわれたのである。

第 4 回研究会として、11 月 9 日（金）、三舟隆之氏（東京医療保健大学医療保健学部准教授）に「浦島説話の成立と展開」を話していただいた。

浦島太郎の物語は国定教科書の物語がベースとなっているが、これは巌谷小波の『日本昔噺』に基づいている。そして『日本昔噺』は室町時代に成立した『御伽草子』の影響が濃厚で、さらに『御伽草子』は、古代の浦島子伝承をベースにしていることが明らかになっている。内容的には中国の神仙思想の影響が濃厚で、中国の神仙小説にあるような恋愛小説的な内容となっている。

一方、『万葉集』の浦島子伝承は、海神を奉る摂津国住吉大社付近が舞台と考えられ、ここでは浦島子は庶民として描かれている。亀は登場せず、海神の娘と偶然に出会って結婚するという神婚伝承である。帰るにあたって「絶対開けるな」と言われた玉篋を開けてしまい、白髪の老人になって死ぬというストーリーは、丹後系の浦島子伝承とは異なっている。浦島子伝承の源流は東アジアにあると思われる。一方日本の記紀神話には「海幸彦山幸彦」の物語があり、海神の宮や海神の娘との結婚の物語が、『万葉集』の浦島子伝承に影響を与えた可能性もある。『日本書紀』『丹後国風土記』の浦島子伝承は丹後地方を舞台とするが、丹後地方では弥生・古墳時代に大陸系の遺物が出土しており、古代において大陸との交易の可能性が指摘されている。そのような土壌の中で浦島子伝承が成立し、平安時代までに浦嶋神社（宇良神社）が成立したと思われる。浦島説話は中国の神仙思想の影響を受けながらも日本で成立し、日本人が好む日本的な説話として発展していったことにあるのではなかろうか。

2013 年 1 月 18 日（金）には、「みちのくワークショップ・東北文学と日本意識」の古代・中世篇を開催した。

小秋元段「中世後期の文芸とみちのく」は、室町時代を中心に制作された短編物語であるお伽草子から始まった。通常、六種類に分類される。そのなかの武家物には「お家騒動物」「復讐譚」と呼ばれる一群があって、類似した物語展開をもつ複数の作品が存在する。これらの作品は物語展開が似るだけでなく、細部のモチーフにも共通点をもつ。その一つとして注目したいのが、多くの作品で主人公とその妻が苦難の旅をする先が陸奥だということである。これらの作品は詳細な道行き文をもちつつも、陸奥の地理についてほとんど触れることはない。つまり、作者は陸奥に深い知識をもっていたわけではなく、「意匠」として陸奥を用いることを重視したらしいのだ。

小口雅史は「古代のみちのくと蝦夷（エミシ・エゾ）」と題して、「みちのく」の住民であった「蝦夷」と中央から呼ばれた人々について、その呼称の由来・変遷と、その意味するところ、あるいは歴史的意義などについて、従来の研究史をもとに再整理した。当初「エミシ」と呼ばれた北方（当時の方位観念では東方）世界の人々は、漢字では中国古典などに基づき「毛人」と表記されていた。

八世紀から九世紀初めにかけて、「エミシ」は人名に盛んに使用されたが、それは東方の勇猛な人を意味する語句としてよく知られていたからである。やがて「エミシ」を表す漢字は「蝦蛦」に変化する。「蝦」は髭の長いエビのことで、「蛦」は山に棲む虫や鳥をあらわす語である。斉明天皇5年の遣唐使は、エミシを帯同して、唐の皇帝に披露したが、その時の問答によれば、エミシは深山の木の根本に住むという。蝦という用字はその風貌や風俗をよく示す語として日本で創作された可能性が高い。やがて11世紀になると、用字は「蝦夷」のまま、音が「エゾ」と変化する。「蝦夷」表記は、いわば作られた差別として意識的に中央で創作されたものであって、実態とは何ら関係がないことについても留意する必要がある。

2012年度の最後には、2013年3月16日（土）・17日（日）の両日、予定通りシンポジウム「江戸人の考えた日本の姿―世界の中の自分たち―」を開催した。これは、法政大学ボアソナードタワーにおける3月13日から4月19日の期間におこなわれた展覧会との同時開催であった。

◆シンポジウム

延廣眞治（東京大学名誉教授）「本居宣長と舌耕文芸」

長島弘明（東京大学教授）「上田秋成の異国」

川添　裕（横浜国立大学教授）「舶来動物からみえる異国・自国」

安村敏信（板橋区立美術館館長）「中国を透かして見る江戸の軽みの正体」

板坂則子（専修大学教授）「曲亭馬琴ワールドの異国と異界」

横山泰子（法政大学教授）「怪物ではない＜日本の私＞」

小林ふみ子（法政大学准教授）「展示より／伝南畝『琉球年代記』刊行事情にみる日本と琉球」

◆同時開催展覧会

法政大学市ヶ谷キャンパス・ボアソナードタワー14階 博物館展示室

開催期間：2013年3月13日（水）～2013年4月19日（金）

延廣眞治氏は落語研究の第一人者である。講演では本居宣長の『在京日記』を取り上げた。宣長は京都で、落語の祖と言われる米沢彦八の噺を頻繁に聞いていた。これらは、『古今和歌集』の俗語訳である『古今集遠鏡』に生かされた。

「大和心」は「漢意（からごころ）」に対する「真情（まごころ）」の意味であったが、宣長の考えの背後にはこのような、日本の俗語の世界があったのではないか、という問題提起である。

長島弘明「上田秋成の異国」は、その宣長と論争を展開した上田秋成に話が拡がった。『胆大小心録』には朝鮮通信使のことが記録されている。『霊語通』では、朝鮮人が話す日本語をが書かれている。実母の姉妹の連れ合いである樋口道与が、寛延元年の通信使の火薬事故のけがを治し、『韓客治験』という詳細な記録を残した。『呵刈葭』「日神論争」では、秋成は日神は日本の神話として考えればよい、と主張するのに対し、宣長は、世界の日神は日本で生まれたと主張した。この論争は、現代のグローバル化とインターナショナル化の違いに通じる普遍的な議論であったことがわかった。

川添裕「舶来動物からみえる異国･自国」は、「男女和合」が日本のキーワードであったことに言及した。幕末の見世物には「物珍しさ」や「驚き」「わかりやすさ」が求められていたので、多くの人々が共有していたポピュラーな文化表象が発見でき、異国や自国についての伝承も見いだせる。たとえば「攘夷」「神風」「神国」「除魔」「和合」などがそれであった。「イザナキ、イザナミの生人形」では、足下にセキレイがいる。これは「和合」の象徴であった。「和合」は明治以降の国家神道からは排除された。

この日の最後に、法政大学法学部の渡辺浩教授をまじえてディスカッションがおこなわれた。渡辺浩氏によって「夫婦別あり」という儒教の教えが日本では理解されず、「夫婦相和し」となったことが述べられた。日本では神道、儒教などと異なる「家」観念を軸とした生活の価値観が柱になっていたからだと思われる。「和合」問題の重要性が指摘された。また、秋成と宣長の論争のなかで、「江戸時代に文化相対主義があったのか」が議論された。

3 月 17 日は、安村敏信「中国を透かして見る江戸の軽みの正体」で始まった。中国南宋の牧谿が長谷川等伯、宗達に取り入れられ、宗達が牧谿の罔両画を達成し、没骨法を完成した。また、狩野永徳による巨木表現を、探幽は軽いものに変えてしまった。それらのなかから、日本独特の余白のある画面が成立した。清の沈南蘋の絵画も広く日本で受け容れられたが、南蘋派の日本人画家たちの絵画は平板で軽く柔らかいものになった。ヨーロッパの遠近法、

陰影法を取り入れた中国絵画を導入しても、日本絵画は「深さ」とは無縁であった。この「軽さ」に、日本の特徴があるのではないか、ということが提起された。

板坂則子「曲亭馬琴ワールドの異国と異界」においては、曲亭馬琴の『椿説弓張月』が取り上げられた。この物語は、源為朝と白縫とのあいだに生まれた舜天丸が琉球を治めるという話だが、琉球は魔物が跋扈する国として描かれた。一方『南総里見八犬伝』では、江戸を取り囲む山中が異国ではなく異界として描かれた。『国姓爺合戦』『風流志道軒伝』『夢想兵衛胡蝶物語』など、江戸時代には遍歴譚によって諸国の像が作られていったことが述べられた。

横山泰子「怪物ではない＜日本の私＞」は、情報が日本の中に入り、図鑑、地図、地理書などが導入されたとき、その中には正確な情報もあったが怪物情報はとりわけ廃れなかったことに注目した。「怪物がいなくてよかった」「周辺諸国にも怪物はいない」という安心感を醸成していた可能性がある。

小林ふみ子「展示より／伝南畝『琉球年代記』刊行事情にみる日本と琉球」は、同時開催された展覧会に基づく問題提起であった。日本における空間概念は中華、近隣諸国、外夷に分かれていた。また「武の国」「和の国」「神の国」という複数の日本像に分かれていることが指摘された。

最後のディスカッションは、これまでの研究とこれからの研究について報告および展望が話し合われた。田中優子よりこれまでの研究が紹介された。大木康東京大学東洋文化研究所教授を中心に、「中華思想」「華夷秩序」について活発な議論があった。漢心（からごころ）批判や中国無視など、日本では常に中国が強く意識される。日本は外国を考えながら自己を定義している。中国は他との関係を考えずに自己完結的である。中華思想は、永遠に「夷」なるものを作り出すシステムで、地理的にフレキシブルである。「華」も中身が入れ替わる。日本にとっての「華」は中国から西欧、米国に変化した。「華」にいる者は自己完結的となり、「夷」にいるものは関係の中でしか自己を規程できない。日本を考えたとき、中華思想的な枠組みからいかに抜け出すか、という問題が突きつけられている。最後に、「裏と表」の研究が必要であることが板坂則子教授より提起された。

ディスカッションの結論としては、華夷秩序の構造研究とともに、草紙類や春画春本類に見られる華夷のあいだをほぐす裏の文化、笑いの文化、そして「和

の国」イメージなどが、さらに研究すべき問題として浮かび上がってきた。

メンバーの業績

代表者および分担者の、この年度の研究業績のうち、代表的なものは以下のとおりである。

単行本については、2013年2月に根津朝彦が『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件―「論壇」・編集者の思想史』（日本経済評論社　全381頁）を刊行した。本書は『朝日新聞』で書評されたほか『朝日新聞』『毎日新聞』『京都新聞』『神奈川新聞』に著者インタビューや紹介が掲載され注目された。本書は風流夢譚事件を戦後の論壇史と思想史の中に置き、戦後ジャーナリズムにおける論壇全体を見渡し、日本の出版と言論界を通して「言論とは何か」という本質的な問いかけをしている。今後書き継がれていく「日本論壇史」の一部を成すもので、戦後における日本意識を思想史とジャーナリズムから見る代表的な著作となるだろう。

田中優子は『グローバリゼーションの中の江戸』（岩波書店　全224頁）で、まさに対外関係における日本意識と日本の方法を書いた。さらに“The Power of the Weave”（LTCB International Library Trust / International House of Japan　222頁）で、今までの、布を通した日本の方法を海外に広く知らしめた。その他に横山泰子『妖怪手品の時代』（青弓社　全246頁）、大木康『明末画本的興盛及其背景』（浙江大学出版社、222-233）と『文学のエコロジー』（放送大学教育振興会、102-140）がある。

雑誌論文では、小林ふみ子「中洲の旅人」『日本文学』（第61巻第9号、58-61頁、2012/09）、横山泰子「秘術の公開―江戸時代の手品本に見られるまじないについて―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第174集所収、43-55頁、2012/03）「続・日本の絵本を非日本語で読む―法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み」（『小金井論集』第9号所収、83-100頁、2012/12）、小秋元段「『梅松論』における足利尊氏―新たなる将軍像の造形―」（『日本文学誌要』第86号、3-11頁、2012/07）、小口雅史・遠藤祐太郎「将門記抜書 陸奥話記 江戸期写 一冊 一六七－二四」（『内閣文庫所蔵史籍叢刊 古代中世篇』8 源平闘諍録 将門記抜書 陸奥話記 2012/06 汲古書院。書評として佐倉由泰「松尾葦江・小口雅史

他解題『内閣文庫所蔵史籍叢刊　古代中世篇　第八巻　源平闘諍録　将門記抜書　陸奥話記』」弘前大学国史研究 134,2013/03 が書かれた）小口雅史「火山灰と古代東北史」（『北から生まれた中世日本』東北芸術工科大学東北文化研究センター編 2012/07 高志書院）、吉田真樹「六条御息所の生霊化の基底について」（『季刊日本思想史』80 号（特集源氏物語）ぺりかん社、51 ～ 69 頁、2012/11）がある。

海外での発表では、大木康による "'Golden Mansions Are to Be Found in the Books': On The Encouragement of Learning by Emperor Zhenzong of the Song"（The Literature of High Stakes and Long Odds: Locating Civil Service Examination Writings in the Late Imperial Cultural Landscape　2012.11.18, University of Massachusettes, Boston）、「明末「悪僧小説」初探」（『近世意象与文化典型』2012.1.29 台湾中正大学）

2012 年 3 月 15 日から 18 日までカナダのヒルトン・トロントで行われた「アジア研究協会年次大会」では、鈴村裕輔が "Women in Noh" と題されたパネルに参画し、"Players, Performances and Existence of Women's Noh: Focusing on the Articles Run in the Japanese General Newspapers" という報告を行った。

6 月 30 日、7 月 1 日には鈴村裕輔が立教大学池袋キャンパスで開催された日本アジア研究会の第 16 回大会に参加し、シェリー・ブラント、マートライ・ティタニラ、マガリ・ブーニュ、シェリー・ブラント、ジョン・クラマー各氏とともに、"Tokyo Now and Then: A Profile of the Changing City" というパネルに参加し、"Figures of Foreigners in Tokyo: The Case of the Cartoon *Sazae-san*" の報告を行った。

8 月 17 日にシドニー大学で開かれた国際シンポジウム "Rewriting History in Manga: A New Medium for Debate?" に鈴村裕輔が参加し、"Materials Disappeared under the Shadow of High Economic Growth: Daily Life of Japanese Recorded in *Sazae-san*" と題し、長谷川町子のマンガ『サザエさん』を対象に、27 年間の連載期間中に描かれた日本の中流階級の人々の姿や生活様式の変遷、あるいは高度経済成長によって失われた戦前からの風俗、習慣の「最後の姿」を、社会的、文化的な背景から検討した。

おわりに

2012年度はとりわけ多くの業績が発表され、研究会とシンポジウムも充実したものになった。とくに「華夷構造」と「都鄙構造」の相同性が浮かび上がり、空間におけるその変動の経緯も明確になった。

2013年度は、歴史的に追ってきた日本意識の変遷が、近現代においてどのように我々の前に立ち現れているのかを軸にし、改めて「日本意識の変遷」の跡を追ってゆく。

研究アプローチ②
「近代の＜日本意識＞の成立－日本民俗学・民族学の問題」

アプローチ・リーダー：ヨーゼフ・クライナー

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「国際日本学の方法に基づく「＜日本意識＞の再検討－＜日本意識＞の過去･現在･未来」」の研究アプローチ②「近代の＜日本意識＞の成立」は、2010 年度と 2011 年度は昭和 10 年代から昭和 20 年代、30 年代までに時期を絞り、日本がいくつかの少数民族のいる植民地を持つ帝国から、ほぼ単一民族の国家に変わった時期を対象として、エスノロジーとフォークロアにどのようなパラダイムの変化があったかという点を中心に研究を進めた。3 年目となる 2012 年度は、日本の民族学の草分けであり民族学の父とも呼ばれている岡正雄の業績を中心に研究を進め、3 回の研究会を開催した。各研究会の概要は以下の通りであった。

2012 年度第 1 回研究会(2012 年 5 月 25 日)は、講師として茨城大学名誉教授･創価大学名誉教授の竹田旦先生をお迎えし、「旧東京教育大学における民俗学の研究と教育―史学方法論教室の誕生から終焉まで―」というテーマでご発表頂き、討論を行った。2012 年に米寿となる竹田先生は、非常に熱のこもった 3 時間近くのお話の後、参加者からの 1 時間以上にわたる熱心な質問に答えて下さった。

竹田先生は、日本民俗学の生みの親である柳田國男に民俗学研究所で直接教えを受けた後、昭和 27（1952）年に新制の東京教育大学に新しく設けられた「史学方法論」（略称：史法）研究室の助手として、のちに和歌森太郎教授とともに日本で初めての正式な専門教育科目である「民俗学概説」などを教えながら、国立大学として最も早い時期から日本民俗学専攻の学生を育成してきた。当時の教育大学の教授陣には、東洋史の直江廣治、非常勤講師で馬淵東一、白鳥芳郎、中根千枝、金子エリカなどの民族学ないし文化人類学の第一人者がおり、どこにもみられない両みんぞく学の共同の意識が教育の面でも非常にはっきり表れていた。研究の面では、昭和 33（1958）年から毎年手がけた民俗総合調査という大規模な調査活動を開始し、『くにさき』（吉川弘文館、1960 年）

をはじめ、9 冊の優れた報告書を世に出した。ただ、その過程で、澁澤敬三の考えた九学会連合という共同の地域研究との良好な連携体制の反面、文化人類学との対立もあった。また、それを解消するにあたって、竹田先生から折口信夫先生、折口先生から柳田先生というルートをうまく活用した。もう一つの研究の分野では、昭和 40（1965）年、東京教育大学民俗学研究室のなかに事務局を置く大塚民俗学会が発足し、機関誌として『民俗学評論』を定期的に発行、また長年にわたって大勢の執筆者の協力を得て『日本民俗事典』を編纂し、昭和 47（1972）年にようやく出版した。

学生のなかには、早い時点から韓国の留学生も大勢いて、修士号や博士号を取得した台湾国籍や韓国国籍の修了生は、のちにそれぞれの国や地域で大活躍している。その延長として、韓国の民俗学会（現在の韓国民俗学会）と協力して、日韓共同調査を計画し実施した。特に竹田先生の韓国民俗学に関する優れた研究は最近まで続けられている。そういう意味で、柳田の伝統を受け継いだ一国民俗学を主張する研究者とはおおよそ違ったアジアの比較民俗の研究が東京教育大学で育てられた。

このような竹田先生のお話からは、本アプローチの「近代日本意識の成立における民俗学・民族学の貢献」というテーマに大きな、そして大変新鮮な刺激をいただいた。

第 2 回研究会は 2012 年 10 月 12 日と 13 日の二日間にわたって行われた。この研究会では、博物館とアイデンティティの形成に関するテーマで、それぞれの専門家からご報告いただき、討論した。

北海道大学アイヌ・先住民族研究センター特任教授である佐々木利和先生には、東京国立博物館、文化庁、国立民族学博物館、そして北海道大学アイヌ・先住民族研究センターで勤務された経験から、「帝室博物館と土俗展示」というテーマで、戦前の帝室博物館（現在の東京国立博物館）における多民族国家のなかの少数民族の文化、なかんずくアイヌと沖縄の展示についてご報告いただいた。

名桜大学名誉教授で久米島博物館名誉館長の上江洲均先生には、「戦後沖縄の博物館」というテーマで、戦後間もなくの焼野原から、アメリカ海軍のハン

ナ少佐の手によって琉球の芸術・文化作品が集められ、最初の郷土博物館が出来上がるまでの歴史と、それがいかにアメリカの占領政策、また、沖縄の人々の自己認識に関係したのかをお話しいただいた。

北海道大学大学院教育学研究院准教授の近藤健一郎先生には、「1920 ～ 1930 年代の沖縄学の展開過程における沖縄県教育会附設郷土博物館の設立」というテーマで、郷土博物館と島袋源七の沖縄の研究との関連についてご報告いただいた。

また、神奈川大学経営学部准教授の泉水英計先生には、「琉球列島学術調査（SIRI）、1951-1954 ―米国人類学・歴史学と沖縄軍政」というテーマで、歴史学者であったカーと琉球政府立博物館（現在の沖縄県立博物館）の設立との関係について、今まで知られていない背景についてご報告いただいた。さらに、泉水先生にご報告いただいたアメリカの学術調査について、桜美林大学人文学系教授の中生勝美先生からコメントをいただいた。

琉球大学法文学部国際言語文化学科教授の赤嶺政信先生には、「戦後沖縄における郷土研究の動向」というテーマで、戦後の沖縄の人々の手による郷土博物館再建、琉球大学の学生による郷土研究会（民俗研究クラブ）、また、最初の講座ができるまでをお話しいただいた。その他に、沖縄文化協会、沖縄民俗学会、宮古八重山地方の郷土研究のあゆみを非常に細かく分析し、説明していただいた。

今回の研究会の成果は、アイデンティティの形成において今まであまり注目されてこなかった博物館の役割がいかに重要であったかを認識することができたことである。

2012 年度の最後の研究会となった第 3 回研究会（2012 年 11 月 30 日から 12 月 1 日）では、2012 年 3 月の国際シンポジウム「岡正雄―日本民族学の草分け」に引き続き、岡正雄の学説を隣接諸科学、すなわち考古学と言語学の観点から再評価する試みを行った。岡正雄は、ヴィーン大学に提出した 1000 頁に渡るドイツ語による博士論文 *Kulturschichtenin Alt-Japan*（古日本の文化層、1933 年）の中で、柳田國男の民俗学、折口信夫の古代研究、そして鳥居龍三などの人類学の膨大な資料を分析し、日本民族文化がいくつかの異なった文

化層に分けられると強調した。またその各文化層を考古学的また言語学的に定義し、旧石器時代以降、古墳時代に至るまで何度かにわたって大陸の異なった地域から日本に流れ込んできたのではないかと推定した。この学説は、1948(昭和23)年に行われた対談「日本民族文化の源流と日本国家の形成」において、石田英一郎の司会のもとで行われた八幡一郎、江上波夫との対談の中で示され、雑誌『民族学研究』に発表した。これは、日本の学界のみならず、一般社会にも大きな反響を起こした。ただ、元になる独文の論文は長い間未刊行で「謎の大著」と言われた。この論文は、2012年の夏に三菱財団の支援を受けて出版され、初めて総合的に紹介された。3月のシンポジウムは、岡正雄の直弟子である祖父江孝男、住谷一彦、岡田淳子をはじめドイツとオーストリアの研究者を交えて2日間にわたって討論されたが、岡正雄の学説と非常に深く関わり合っている考古学と言語学からのアプローチが不足していた。そこで、今回の研究会ではその両分野の専門家にお願いして、発表・討論していただいた。

初日である2012年11月30日には、明治大学文学部教授の石川日出志先生に「日本民族起源論における考古学と岡正雄の乖離」というタイトルで報告していただいた。石川先生はまず、岡は柳田の談話会に参加し、ヴィーンへ留学する前に、前世代を代表する学者である鳥居龍蔵の学説が岡の学問形成の下地になったのではないかという重大な指摘をされた。そのうえで江上波夫と八幡一郎の発言に注目し、江上のいわゆる騎馬民族征服王朝説に対する考古学、なかんずく小林行雄の非常に厳しい批判を紹介した。また、それと打って変わって、八幡発言に対する考古学界の無反応の背景について触れ、そういった考古学界の反対はありつつも1970年代に入って、岡の学説を歴史民族学の立場から引き継いだ大林太良の論文「縄文時代の社会組織」、そして、佐々木高明の『稲作以前』という照葉樹林文化論として知られている学説が、日本の考古学界に大きく影響ないし刺激を与えたことを指摘し、報告を締めくくった。

また、2日目となる2012年12月1日には、言語学の分野の、獨協大学外国語学部准教授のパトリック・ハインリッヒ先生に「現在言語学の観点から見た岡正雄の先史時代の文化と言語層理論」と題してご発表いただいた。ハインリッヒ先生は、岡の学説は大きく見て、言語学の分野でもそのまま認められた

ことがなかったものの、考古学とは異なり、言語学の諸学説に最初から大きな刺激を与えてきたと指摘した。例えば大野晋の『日本語の起源』、あるいは20世紀後半を通じて日本国内外で論じられたいわゆる日本語の南方起源論対北方起源論（オーストロネシア語族対アルタイ語族）の論争はそのような例の一つである。しかし、現在の言語学ではそういった語族の研究や、言語の変化を時間軸だけで見るという方法論からは離れて、むしろ、言語接触およびそれによるクレオール語の発生などに研究が集中してきているので、岡の学説はそのような観点から見てもまだ興味深い面があるのではないかと締めくくった。

なお、両者の発表は3月の国際シンポジウム、また他の2回にわたる研究会で行われた「東京教育大学と民俗学研究」、「博物館とアイデンティティならびに沖縄研究」に関する発表とともに、『日本民族学の戦前と戦後――岡正雄と日本民族学の草分け』というタイトルの報告書にまとめ、2013年3月に東京堂出版から出版された。

研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在－東アジアから」

アプローチ・リーダー：王　　敏

研究目的（2010-2013 年）

アプローチ③は、これまで法政大学国際日本学研究所の中国、東アジアにおける日本研究チームが長年取り組んできた「国際日本学研究」の一環である「異文化としての日本研究」の確立とその方法論を活用した、時代の変化に応答できる「異文化・外部」の視点を取り入れた総合的日本研究という主旨を引き継ぎ、これまでの研究姿勢と成果を発揮させていく方向に位置づけられている。

研究対象は同じ日本ではあるが、異なる文化背景におかれている東アジア諸国の日本研究のありかたがそれぞれの価値基準によって独自に展開されている。異なる文化背景におかれている日本意識およびその変容への研究を媒介とし、相互の再発見と、研鑽、学術発展を目指している。また、地域性を反映させるおのおのの研究成果から、建設的思考を抽出し、東アジアに、日中両国にとっても有用な参考ケースを提供させたい。なお、日本または一地域中心の「日本意識」を越えて、自他再認識、再発展のための「日本意識」を再検討し、互いに「参照枠」となる啓発型の研究活動を志向するものである。

急速に変化する中国社会を重点に東アジアを研究範囲にし、「日本意識」の現在に関する研究調査・分析を行う。他方、「日本意識」と表裏一体関係でもある諸外国の自己認識と、相対的に比較確認を重ね、互いの参照枠となる相互研究の姿勢を意識しながら、研究会の開設などの交流活動も併せて進める。

「日本意識」に内在する建設的価値を再確認しつつ日中、東アジアへの平和構築に広く活用できる「応用」型研究と交流型研究を意識的に取り組み、模索して行く。

なお、本アプローチは研究成果を意識的に発信し、社会貢献、平和貢献にも連結されるよう、進めていく。

研究内容

1. 2010 年度

①主な研究活動

東アジア地域の歴史的・文化的な歩みを考えると、まず文化圏として定義された古典東アジア、続いて西欧植民地圏としての近代東アジア、さらに第 2 次大戦後の冷戦によって分断された東アジアとなる。そしていま、グローバル化のもとで平和的･発展的な東アジア再構築の段階を迎えてきた。本研究は「現在」という時間軸に据えつけ、東アジアにおける日本意識の輪郭を垣間見つつ整理するところを重点にしてきた。

「東アジアの変化と日本研究に求められる対応」というテーマ課題のもとに、東アジアにおける日本意識の現在を概略的に把握するための研究会を 10 回、シンポジウムを一回開催した。

法政大学国際日本学研究所 2010 年度東アジア文化研究会・シンポジウム一覧

於：法政大学市ケ谷キャンパス

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 1 回 2010.4.27（火）	菱田　雅晴 法政大学法学部教授	中国：党をアナトミーする
第 2 回 2010.5.31（月）	羽場　久美子 青山学院大学国際政治経済学部教授	日中和解と東アジア共同体－ヨーロッパ統合に学ぶ
第 3 回 2010.6.22（火）	金　煥基 法政大学国際文化学部客員研究員、韓国・東国大学校文科大日語日文学科副教授	原点としての儒教的家父長制、そして狂気と異端－梁石日の『血と骨』を中心に－
第 4 回 2010.7.27（火）	王　秀文ほか 8 名 大連民族学院と法政大学の研究者による共同発表	国際シンポジウム〈日本研究の最前線－大連における多文化共生・異文化理解の研究と実践〉
第 5 回 2010.9.21（火）	張　季風 中国社会科学院日本研究所経済研究室長、教授	日中経済協力の過去・現在と将来
第 6 回 2010.10.5（火）	平川　祐弘 東京大学名誉教授	「自由」はいかにして東アジアへ伝えられたか－洋学に転じた中村正直
第 7 回 2010.10.26（火）	徐　興慶 台湾大学日本語文学研究所教授兼所長	東アジアから見た朱舜水－文化発展の役割とそのアイデンティティー
●国際シンポジウム 2010.11.5 － 7	中国・四川外国語学院との共催 基調講演・中央大学教授李廷江、日中両国の研究者による報告	日本学研究の方法論とその実践－ ～日本研究の視点と姿勢を中心に～

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 8 回 2010.11.12（金）	朴　裕河 韓国・世宗大学校人文科学大学教授	日韓歴史和解のためのいくつかの課題
第 9 回 2010.12.8（水）	ブリジ・タンカ インド・デリー大学教授	忘れられた近代インドと日本の交流
第 10 回 2011.1.13（木）	王　維坤 西北大学文化遺産学院教授、西北大学日本文化研究センター主任	和同開珎の「同」と「珎」と「圀」の文字から見た中日の文化交流史

注 1.　第 4 回は法政大学国際日本学研究センター・国際日本学研究所の主催で国際シンポジウムとして行われた（後援：人民日報海外版・日中新聞社）。
注 2.　大型国際シンポジウムが国際交流基金の助成を受けて四川外国語学院との共催で中国・重慶にある四川外国語学院で開催された。

②確認できた情況

・日本と東アジア諸国の間に価値判断の基準の相違が実在している。
・東アジアの共通性と西洋的価値をどう共存させていくかが重大な課題である。

③主な研究成果

・『異文化としての日本――内外の視点』法政大学国際日本学研究センター、研究所、2010 年 4 月。
・『詩人　黄瀛』中国・重慶出版社、2010 年 6 月。
・『日本文化研究：歴史足跡与学術現状【日本文学研究会三十周年記念文集】』中国・訳林出版社、2010 年 8 月。
・『忠北大学校 2010 年　第 4 次　韓･中･日国際学術大会　近代化社会とコミュニケーションの技法　――グローバル化と漢字文化圏の言語』韓国・忠北大学校、2010 年 10 月。
・『東アジアの日本観　――文学・信仰・神話などの文化比較を中心に』三和書籍、2010 年 10 月。
・『転換期における日中研究――相互発展としての日本研究』法政大学国際日本学研究センター・法政大学国際日本研究所、2010 年 10 月。
・『日本研究論壇』台湾大学日本語文学研究所、2010 年 12 月。
・『転換期日中関係論の最前線――中国トップリーダーの視点』三和書籍、2011 年 3 月。

2. 2011 年度

①主な研究活動

「参照枠」としての日本研究という課題を中心に活動してきた。2011 年度、法政大学国際日本学研究所で開催する東アジア文化研究会では、次に述べる文献研究の対象である叢書 10 巻の輪読を中心に議論し、研究報告会 10 回と国際会議 3 回を開いた。

・【文献研究】

「日本意識」の現在に関する文献研究のテキストとして、2010 年 3 月から 10 月にかけて中国・世界知識出版社から刊行された『日本現代化歴程研究叢書』（10 冊）を選定した。

・同研究の成果及び意義

(1) 中国における日本認識の再定義が明確になった

中国にとって、日本という隣国の認識は、戦争による「敵対関係」から、国交正常化を経て「日中友好の対象国」へと変遷し、その後は 1980 年代の改革開放政策の開始と共に、大規模な「経済援助の支援国」としての存在であった。現代中国における日本の位置づけとは、このように両国の歴史関係と発展段階の相違によって、学ぶべき「近代化のモデル」として明確に再定義した。それは、換言すれば「研究対象国」として再認識した。

(2)「日本研究」の進展を描かせてくれた

地域研究の視角から、対象国としての日本を捉え、さらに日本と中国の近代化の過程を検証するという、世界的な基準を意識して検証しようとする研究姿勢は、中国における日本研究が顕著に発展していることを実証するものである。

(3) 日本研究を継続させている背景が覗える

以下の事象を明らかに指摘してある

・ 日本語科学生数の急増に伴う日本を知る参考書需要の拡大

国際交流基金の統計によれば、中国における日本語学習者数は世界最多の 86 万人である。

・ 近年の中国における日本翻訳作品の超人気

漫画やアニメなど、若者世代から支持される日本文化を中心に、近年では日本の小説が刊行直後に中国語訳されるなど、文化的なブームとなっている。

・日本学術界との盛んなる交流と日本研究レベルの向上

これまでの学術交流が、分野、規模、人員数など、あらゆる面で充実しつつある。

・中国人の世界に対する関心の高さ

経済発展を背景として、中国人が世界的な視野を広げ、好奇心旺盛に外国文化を受け入れており、もっとも身近な日本文化に強い関心が集まっている。

・【研究会の開催】

法政大学国際日本学研究所 2011 年度東アジア文化研究会・シンポジウム一覧

於：法政大学市ケ谷キャンパス

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 1 回 2011.4.27（水）	楊　偉 四川外語学院日本学研究所所長、日本学研究所外国人客員研究員	中国における日本文学史研究の新展開―王健宜氏『日本近現代文学史』をテキストに―
第 2 回 2011.5.25（水）	陳　毅立 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	中国における思想史研究の方法論に関する思索―『日本近現代思想史』を媒介に―
第 3 回 2011.6.29（水）	王　雪萍 東京大学教養学部講師（専任）、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	中国における近現代日中関係研究の発展と限界―最新日本研究成果『日本近現代対華関係史』を通じて―
第 4 回 2011.7.27（水）	馬場　公彦 株式会社岩波書店編集局副部長	対日警戒論の歴史的脈絡をたどる―米慶余『日本近現代外交史』を読む―
第 5 回 2011.8.3（水）	郭　勇 大連民族学院講師、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	中国研究者から見た日本経済の歩み―楊棟樑著『日本近現代経済史』の査読を通じて―
第 6 回 2011.9.28（水）	及川　淳子 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	日本政治研究の視座を考察する―王振鎖・徐万勝『日本近現代政治史』を読む―
●国際シンポジウム 2011.10.21-25 （金－火）	中国・四川外国語学院との共催 日中両国の研究者による報告	地域研究としての日本学―学際的な視点から―
第 7 回 2011.10.26（水）	李　潤沢 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	国家体制を支える制度としての「家」―『日本近現代社会史』を媒介に―

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 8 回 2011.11.30（水）	川邉　雄大 二松学舎大学非常勤講師、沖縄文化研究所国内研究員	日本近代美術史に関する一考察―彭修銀『日本近現代絵画史』を媒介として―
第 9 回 2011.12.7（水）	姜　克実 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授	中国学界における日本文化論
第 10 回 2012.1.11（水）	劉　迪 杏林大学総合政策学部准教授	日本研究の可能性―臧佩紅氏『日本近現代教育史』を媒介に―
●中国人民外交学会・国家行政学院・一般財団法人ニッポンドットコム・法政大学国際日本学研究所共催国際シンポジウム 2012.3.15（木）	小倉和夫（前国際交流基金理事長） 王敏（法政大学教授） 宮一穂（ニッポンドットコム副編集長・京都精華大学教授） 原野城治（ニッポンドットコム代表理事） 趙啓正（中国人民政治協商会議外事委員会主任） 黄星原（中国人民外交学会副会長） 周秉徳（周恩来総理の姪・前中国人民政治協商会議委員） 汪海波（中国社会科学院教授）	中日公共外交・文化外交の互恵関係深化の総合的討論
●法政大学サステイナビリティ研究教育機構・国際日本学研究所共催国際シンポジウム 2012.3.20（火・祝）	熊田泰章（法政大学国際文化学部教授） 大倉季久（桃山学院大学社会学部講師） 吉野馨子（法政大学サステイナビリティ研究教育機構准教授） 関いずみ（東海大学海洋学部准教授） 杉井ギサブロー（映像作家） 張怡香（アメリカ米中連合大学学長、ハワイ大学医学院院長、教授） 雷剛（重慶出版社編集部） 賈蕙萱（北京大学元教授） 金容煥（韓国倫理教育学会会長、忠北大学教授） 岡村民夫（法政大学国際文化学部教授） 王敏（法政大学国際日本学研究所教授）	震災後のいま問いかける
特別研究会 2012.3.21（水）	張怡香（アメリカ米中連合大学学長、ハワイ大学医学院院長、教授） 雷剛（重慶出版社編集部） 賈蕙萱（北京大学元教授） 金容煥（韓国倫理教育学会会長、忠北大学教授） 王敏（法政大学国際日本学研究所教授）	変化の中の日本観―東アジア同志の対話―

注 1.　大型国際シンポジウムが国際交流基金の助成を受けて四川外国語学院との共催で中国・重慶にある四川外国語学院にて開催された。

注 2.　国際シンポジウムが日中国交正常化 40 周年を記念し、中国人民外交学会・国家行政学院・一般財団法人ニッポンドットコムと共催で北京の中国人民外交学会にて開催された。

注 3.　大型国際シンポジウムが国際交流基金の助成を受けて法政大学サステイナビリティ研究教育機構との共催で法政大学市ケ谷キャンパスにて開催された。

② 2011 年度開催した国際会議の意義と成果

・ 2012.3.15（木）、北京にある中国人民外交学会・国家行政学院・一般財団法人ニッポンドットコム・法政大学国際日本学研究所共催国際シンポジウム：「中日公共外交・文化外交の互恵関係深化の総合的討論」である。

収穫数多く得られた中で、とりわけ以下二点の意義が深いものであった。

①国家間相互認識の対象が国民多数に設定される場合、基準または認識を共有できる範囲が広いほど望ましい。そのために公共教養、公共意識、公共教育の共有が可能な限り求められている。「共有」を目指して行動する過程において、公共外交の効果がすでに無意識のうちに発揮されていると考えられる。よって、公共外交の意識と役割について今後一層の自覚と実践が期待されよう。

②文化外交はもはやある地域を中心とする文化の発信と交流を交差させる役割を越え、グローバル的な多国間の相互浸透、相互中心、相互学習、相互発展、相互互恵を目標とする方向へ転換しつつある。

・ 2012.3.20（火・祝）、法政大学サステイナビリティ研究教育機構・国際日本学研究所共催国際シンポジウム：「震災後の今に問いかける」である。なお、同会議は国際交流基金の支援を受けて開催した。

東日本大震災発後、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が再び注目されている理由を世界から研究者によって分析されていた。

未曾有の災害を経験し人間が力強い「言葉」を求めている。

人間はどのように自然との関わり方を考えてきたかという精神の遍歴を、体験知として人類共有の智恵へと高めていきたい。

東日本大震災の体験を賢治が示した原風景への転換として捉えるならば、人間にとっても生き方の転換が求められ、素朴で原初的価値観の蘇生へと繋がっていくだろう。自然との融合という普遍的な価値の可能性については、日本だけでなくアジアに広く共通する「哲学」や「思想」でもある。

③研究成果

・『地域研究としての日本学――学際的な視点から』中国・四川外国語学院

2011 年 10 月

・国際日本学研究叢書 15『地域研究のための日本研究　中国、東アジアにおける人文交流を中心に』法政大学国際日本学研究所発行 2012 年 3 月

・『西南地域における日本学の構築――日本学研究の方法論と実践を中心に』重慶出版社 2011 年 8 月

・“The East Asian Cultural Research Team of the Research Center for International Japanese Studies at Hosei University”（法政大学国际日本学研究所东亚文化研究课题组）」英文学会誌 *Journal of Cultural Interaction in East Asia*, Vol.3（電子化公開：http://www.sciea.org/japan/publishing03.html）

3. 2012 年度

①主な研究活動

学術研究における諸外国との相互理解、互恵関係を深化させる方向性を探り、内外に通じる知的ネットワークの構築をかためる。他方、現在における東アジア文化関係の諸相を整理しつつ共有の接点を確かめ、公共教養への通路の開拓に試みる。

・積極的に会議参加、報告をする。

・対象国の若手研究者を受け入れる（15 名ぐらい）。

・研究会を継続的に開催する。

法政大学国際日本学研究所 2012 年度東アジア文化研究会一覧

於：法政大学市ケ谷キャンパス

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 1 回 2012.4.12（水）	オーレリ・ネヴォ フランス国立科学研究センター研究員	“新世界の中心”としての上海 ―上海万博の中国館＜東方の冠＞を読む―
第 2 回 2012.5.30（水）	陳　東華 長崎中国交流史協会専務理事	長崎唐通事とその子孫
第 3 回 2012.6.2（水）	オリヴィエ・バイルブル 北京大学中国語学科博士研究員	韓国語における中国語からの借用語と日本語の語彙の影響
第 4 回 2012.7.11（水）	王　暁秋 北京大学歴史学系教授	19 世紀における東アジア諸国の対外意識
第 5 回 2012.8.1（水）	安井　裕司 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員、早稲田大学エクステンションセンター講師	格差社会と「下からのナショナリズム」～ナショナリズム論からの日中欧の比較考察～

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 6 回 2012.9.26（水）	鈴村　裕輔 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	「日中国交正常化 40 年」を超えて ―石橋湛山の対中国交正常化への取り組み
第 7 回 2012.10.31（水）	西園寺　一晃 工学院大学孔子学院院長	日本最大の経済パートナー・中国をどう見る
第 8 回 2012.11.7（水）	内田　慶市 関西大学外国語学部教授	言語抵触と文化交渉学―中国言語学および翻訳論の立場から
第 9 回 2012.12.5（水）	橋爪　大三郎 東京工業大学大学院社会理工学研究科教授	東アジアの宗教と社会
第 10 回 2013.1.23（水）	石川　好 作家、新日中 21 世紀委員会委員	日本対立の心理
特別研究会 2012.12.26（水）	楊　棟梁 南開大学世界史研究院院長、教授	日本研究を目指す若者へ

②収穫

日中韓の真の相互理解への一歩として、古代から現代までの三か国の共通性や日本への視点などを明確化してみた。

三か国の「公共」からの共通性を見出している。韓国は『朝鮮王朝実録』における「公共」を用例にとり、朱子学にまで分析を行っている。中国は儒学の民衆化、士の象徴でもあった儒学が市井に広まったことにより、公共幸福は制度社会と民間社会という複雑な社会構造から形成されてきた。これらを踏まえたうえで今後の日中韓の三か国の共通性、文化や経済など全てを通して、国同士のあり方そして付き合い方を考えていく手掛かりを示した。

また、宗教・歴史・言語学からの見た三か国の文化関係を分析している。三か国の原点を洗いなおすために、世界の視点から日中韓の文化関係を見ていけるようになっている。中国という大国から特に言語を輸入した日韓はそのまま模倣ではなく、自国にあうように変化させていき、やがては唯一独自のものとした。しかしながら互いに影響を現代でも受けていることは間違いなく、これらの歴史を踏まえた文化関係を認識していかねばならない。日中韓の関係や視点などの新たな切り口が、三か国同士の未来へのより良い発展へと繋がっていくことをアプローチした。

③研究成果

『地域発展のための日本研究――中国、東アジアにおける人文交流を中心に』（勉誠出版　2012 年 10 月）

【国際日本学研究叢書 18】『相互探求としての日本研究――日中韓文化関係の諸相』（法政大学国際日本学研究センター　2013 年 3 月）

③研究成果

(1) 研究成果を反映させる院生の卒論が高く評価され、院生三名が 2013 年 3 月 24 日、順調に修士号を取得した。

・ 蘭一博「漢文月刊雑誌『東洋』に関する一考察」
・ 蔡希蕙「兆銘の日本留学期間における勉学状況に関する一考察」
・ 周曙光「日本滞在時期における章士釗――その活動を中心に」、（法政大学大学院博士課程に進学）

また、法政大学国際交流センター、日本国際交流基金の招聘研究者各位一名、中国教育部の研究支援基金による派遣若手研究者三名を受け入れ、研究の指導を担当した。

(2) 現時点における本研究の到達点

冒頭の繰り返しは避けるが、本研究に与えられているテーマは東アジア地域、とくに中国の日本意識の現在を映し出すことにある。だが、日本一国を中心に「日本意識」を単独に抽出しても一極的研究となり、結果的に不完全な日本意識となる恐れがあり、客観性がかけることが明らかと思われる。即ち、日本意識そのものを相対に位置づけられる参照枠が前提にされなければ、日本意識を浮きぼりにする土台がなくなり、日本を対象にする課題設定が孤立無援の存在となり、独善的な主観評価になってしまう。

東アジアとの相互認識を映し出す過程がなければならない。日本意識の共有が可能になるためには、内外にとっても相互の参照枠と位置づけられる日本意識の定義を明確化し、異なる地域間の交流という大前提が不可欠である。

本まとめの内容が以上の構想に沿って、日本意識について過去の事例を検証し、現在および今後の参考になるべき啓示に関する提示を念頭に、日本意

識および他者認識の相関関係をベースにすることをアプローチの条件とする。

ともあれ、日本と東アジア、お互いの参照枠となり、相互学習、相互発展の「古層」からスタートして現在に進まれ、未来へ共に翔けていくしかないと推察されよう。

研究アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量－未来へ」

アプローチ・リーダー：安孫子　信

研究アプローチ（4）「＜日本意識＞の三角測量－未来へ」は、2012 年度に国際シンポジウムを 1 回、勉強会を 4 回、そして研究アプローチ（3）との共催による研究会を 1 回開催した。

1. シンポジウム、勉強会、研究会の開催実績

2012 年度に開催したシンポジウム、勉強会、研究会の一覧を下記に示す。

（1）シンポジウム

■ 2012 年アルザスシンポジウム「国家アイデンティティと宗教」

開催日：2012 年 11 月 2 日（金）～ 11 月 4 日（日）

主　催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学センター東アジア文明研究所、ストラスブール・マルク・ブロック大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所

会　場：アルザス欧州日本学研究所

（2）勉強会

■第 1 回勉強会

開催日時：2012 年 7 月 5 日（木）18：30 ～ 20：40

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー室

報告者：シェリー・ブラント（RMIT 大学専任講師）

論　題：歌でつなごう―NHK 紅白歌合戦における国民の上演―

司　会：安孫子信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

■第 2 回勉強会

日　時：2012 年 7 月 18 日（水）18：30 ～ 20：40

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー

室

報告者：ヘレナ・ガウデコヴァ（ナープルステック・アジア・アフリカ・アメリカ文化博物館学芸員）

論　題：ナープルステック博物館（プラハ）の日本コレクション―日本の伝統芸術に対する中央ヨーロッパの視点―

司　会：安孫信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

■第3回勉強会

日　時：2013年1月22日（火）18：30～20：30

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：チエリー・オケ（リヨン第3大学教授）

論　題：現代マンガに登場する、ロボットやサイボーグ、ミュータント、ハイブリッドたちを哲学する―ポストヒューマンとはなにか？―

司　会：安孫子信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

■第4回勉強会

日　時：2013年2月22日（金）18：30～20：30

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：ヴァンサン・ジロー氏（京都大学研究員）

論　題：九鬼周造の実存的美学

司　会：安孫子信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

(3) 研究会

■第1回東アジア文化研究会

日　時：2012年4月12日（木）18：35～21：15

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：オーレリ・ネヴォ（フランス国立科学研究センター研究員）

論　題：“新世界の中心”としての上海―上海万博の中国館＜東方の冠＞を読む―

司　会：安孫子信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

挨　拶：王敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

2. 2012年アルザスシンポジウム「国家アイデンティティと宗教」

2.1　シンポジウムの概要

2005年に前身である「日本学とは何かーヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究」が行われて以来、年1回ずつ行われている国際日本学シンポジウムも、今回で8回目を迎えた。今回の総合テーマは「国家アイデンティティと宗教」であり、日本側と欧州側の研究者16人による報告と討議が行われた。

各報告の概要は以下の通りであった。

(1) 王敏（法政大学［日本］）／日本の民間信仰における混成性：シルクロードと禹王信仰を事例として

日本の民間信仰の中に見られる中国文化の影響を、日本全国約50か所で確認されている、中国の夏王朝の創始者とされる禹を讃える禹王碑の事例、また、『西遊記』や『アラビアンナイト』に親しみ、作品の中でもそれらに言及している宮沢賢治の事例を通じて検討し、日本人の民間信仰が混成的で、他国の伝承にも開かれたものであることを示した。なお、この報告は遠隔を利用し、法政大学市ケ谷キャンパスから行われた。

(2) ジョセフ・キブルツ（国立科学研究学院［フランス］）／蓮華と菊・花と日本

国家と宗教とが結びついた決定的歴史的事例として、752年の東大寺の建立と1889年の大日本帝国憲法の発布とを、「蓮華」と「菊」というそれぞれのシンボルにも触れて取り上げ、日本における宗教の政治的役割を分析した。前者では聖武天皇によって、仏教による国家の統一が目指され、また後者では明治天皇によって、告文で皇道のあり方が示されたのである。

(3) マチェイ・カーネルト（アダム・ミツキェヴィチ大学［ポーランド］）／無国家、無アイデンティティ、無宗教―

8 世紀の日本「8 世紀の日本における国家アイデンティティとは何か？」と「8 世紀の日本における宗教の規制は日本独特の現象か？」という問いを、マイケル・マンの社会に関する分析の枠組みを用いながら考察し、「8 世紀には state は存在したが nation は存在しなかった」と「国家による宗教の規制は日本独自のものではなかった」という結論を導いた。

(4) 高橋悠介（神奈川県立金沢文庫［日本］）／国土観と神仏習合

1370 年に描かれ、2004 年に発見された日本図を手掛かりに、当初は仏教者によって「辺境の小国」として認識されていた日本が、本地垂迹説により、「仏が神の姿を借りて治める偉大な国」として認識される過程が、資料に基づき検討された。

(5) マーク・トゥーエン（オスロ大学［ノルウェー］）／江戸後期の武士による宗教と国家

明治時代に起きた廃仏毀釈運動の理論的な背景をなした江戸時代後半の書物『世事見聞録』（武陽隠士、1816 年）を中心に、江戸時代における僧侶の社会的地位と、求められたあるべき姿がどのようなものであったかが考察された。

(6) フレデリック・ジラール（フランス国立極東学院［フランス］）／鎌倉幕府の為に、新しい寺院の模範が要求された

曹洞宗で根強く支持された玄奘三蔵崇拝と鎌倉幕府の第三代将軍源実朝が見た自らの前世に関する夢の逸話を手掛かりに、13 世紀になって日本で流行した禅宗が、中国の禅宗の伽藍の配置を手本に寺院の構造を決定するなど、「新しい時代の新しい宗教のあり方」を示すものであったことが確認された。

(7) ジャン＝ピエール・ベルトン（社会科学高等研究院日本研究所［フランス］）／ナショナル・アイデンティティを通して見た新宗教

「疑似宗教」、「淫祠邪教」と見なされやすい日本の新宗教あるいは新新宗教を対象に、当初は反政府、あるいは反文明として出発しながら、日本の文明や伝統の保持を掲げる保守的な傾向へと変化している現状、他方で、「日本的なもの」を含んでいるにもかかわらず一部の新宗教や新新宗教が外国でも受け入れられている現状が、それぞれ分析された。

(8) 内原英聡（法政大学［日本］）／八重山の御嶽信仰―近世琉球・先島大津波の前後を事例として

1771 年に起きた先島大津波を対象に、琉球王府による民間信仰への対応が規制から解放へと至る過程が検証され、さらに、沖縄における民間信仰の重要な形態である御嶽進行を事例とし、信仰と祭祀の関係、すなわち信仰における「かたち」と「こころ」の関係が吟味され、「かたち」が変化すれば、祭祀を取り巻く人間の生活そのものが変化し、「こころ」も変化していくことが示された。

(9) ヨーゼフ・クライナー（法政大学［日本］）／琉球王国の宗教体制

沖縄における民間信仰と琉球王府における正統的な信仰のあり方とが、女司祭であるノロの位置付けやニライカナイ、オボツカグラの概念を手掛かりに検討され、村における信仰の実際と王国における信仰の形態とが対比的に明らかにされた。これに加えて、現代の沖縄における信仰の様式も考察された。

(10) フレデリック・ルシーニュ（リヨン大学［フランス］）／民俗学は日本のアイデンティティについて何を語るか―名越町のオコナイ行事を事例に

滋賀県長浜市名越町の伝統行事である行内に関する調査結果が紹介され、そこでは、宗教的心性が地域の習俗、家の伝統、個人の信仰の各レベルで別々に、しかもからみ合って存在していることが示された。加えて、日本の民俗学、とりわけ柳田民俗学についての研究のフランスにおける蓄積や動向が紹介された。

(11) 坂本勝（法政大学［日本］）／記紀神話の自然観

『古事記』及び『日本書紀』を対象に、上代語における「もの」の観念と、そこに現れた、天孫降臨以前には「荒ぶる自然」の象徴となり、天孫降臨以降には「都市と国家を襲う霊威」として考えられた「「もの」のざわめき」のあり方が、日本人の宗教的心性の起源にあるものとして、実証的に検討された。

(12) 川田順造（神奈川大学／法政大学［日本］）／人を神に祀る風習：日本のアイデンティティを考える手がかりとして

東南アジアや欧州の一部にも類似する習慣があるものの、日本ではその

数が著しく多い「人を神として祀る」という風習が多々の実例に即して検討された。加えて、明治時代までは天皇家と仏教の結びつきが強かったことが確認された。

(13) 鈴村裕輔（法政大学［日本］）／清沢満之の真俗二諦論批判

真宗大谷派の僧侶で哲学者であった清沢満之が、教団内で主流となっていた、現世での価値基準に従う俗諦と信仰上の価値基準である真諦とを区別する「真俗二諦論」に対して行った批判を検討し、清沢にとっては、俗諦と真諦とは並行的に存在するのではなく、俗諦が終わったところが真諦の出発点となることが示された。

(14) ディディエ・デーヴァン（国立科学研究学院東アジア文明研究所［フランス］）／趣味から自己定義へ：日本に於ける禅の位置の考察

欧米において日本の信仰の代表例として考えられている禅について、禅宗の発祥の地である中国では宗教であった禅が、日本では宗教というより生活実践として広まったこと、そして、欧米が受け入れた禅も、宗教としてというより、生き方の指針を得る方法としての日本の禅であったことが示された。

(15) 安孫子信（法政大学［日本］）／近代国家と宗教―西周（1829-97）の宗教観

「哲学」という言葉を生み出した西周を対象に、オーギュスト・コントの哲学に依拠して自らの学問の体系を築き挙げた西が宗教をどのように捉えていたかを検討し、信教の自由と法への服従を要求するとともに、天皇制を擁護しつつも神権的な政治体制を批判していたことが明らかにされた。

(16) 星野勉（法政大学［日本］）／無常―日本の風土と宗教意識―

「無常」という概念を手掛かりに、風土と国民性、風土と宗教の関係を検討し、「詠嘆的な無常感が道元によって抽象的な面が捨象され、さらに世俗化することで茶の湯や剣術などが「道」へと展開する契機をなす」という、仏教における無常の概念の日本化の過程が確認された。

以上の各発表の後には質疑応答が続き、また各日とも、全発表終了後には全体討議が行われて、いずれにおいても活発な議論が交わされた。とくに全体

討議では以下のような問題が新たに出された。「外来の宗教の土着化の過程」、「‘日本の宗教’や‘日本人の宗教’が外国でも受け入れられる背景」、「宗教における心と国家との関係」、「アジアやアフリカで一般現象である、西洋が進出した19世紀後半以降の新興宗教の多発生の理由」、「仏教が伝来する以前にも認められうる日本人の‘はかなさ’の感情の起源」、「伝来時の仏教が日本人の内面に与えた影響」、「日本における‘人を祀る’と‘ものを祀る’との関係」、「日本本土と沖縄における死者に対する時間的な感覚の相違の問題」、「地理的な国土と宗教のあり方の関係」。これら事項は、今後検討すべき課題となろう。

2.2　シンポジウムの成果と意義

日本の国家アイデンティティと宗教の問題が、こうして、哲学、歴史学、文学、人類学、社会学、政治学などの多様な観点から、しかも日本の内外の立場から考察されたことは、意義深いことであった。しばしば日本における宗教と政治をめぐる議論が、「国家神道と戦争」や「靖国問題」といった点に限定されがちであることに鑑みるなら、分析の手法の多様性と議論の多層性という点で、問題自身の客観化に、今回のシンポジウムは多大な意義を持つものであったと言えるであろう。その上で今回のシンポジウムが指し示す、日本における、そして、日本人における宗教の一般像を敢えて描き出すとすれば、一方で、精緻に体系化され国家や政治の制度と固く結びついていくということもなく、また他方で、個の心や内面性に絶対的に位置づくということもなく、習合現象に見られるように、社会習俗的な場所に絶えず向かっていく傾向にある、といったことになるであろう。その意味で日本で宗教は政治的存在ではない。しかし、そうではないとしても、それはきわめて社会的な存在である。その限りで宗教は、日本のアイデンティティと分かちがたく結ばれたものと言い得るのである。ただ、さらに付言すれば、この宗教的習俗の場所は混成的で、外国からのものもそこには多く流れ込んできているのである。宗教から見た日本のアイデンティティは、こうしてまた、閉じたアイデンティティでもないのである。

以上、学術的成果について述べたが、これに加えて、2011年から始まったストラスブール大学の日本学専攻の大学院生による聴講が、今回は学部生にも拡大され、3日間の会期中に延べ20人以上の学生が会場を訪れたことも付言

しておきたい。学部生の段階から、自らが専攻する日本研究という分野の最新の学問動向に触れることで、学ぶことに対する意欲形成が促進されることは有意義なことである。さらに、今回も現地に在住する、研究者ではない一般の方々からも、聴講参加者を得た。国際日本学シンポジウムは研究促進だけでなく、こうして研究活動の社会への還元という面でも、一定の役割を果たしえているのである。

「電子図書館の構築」の現状と課題

小口　雅史

本アプローチでは、企画当初から、国際日本学研究所のサーバー室に、基幹となる aterui サーバーをはじめとして静止画や動画を大量に蓄積でき、かつそれを高精度に処理できる複数の NAS（Network Attached Storage）その他のハードウェアを準備して、インターネットを通じて研究所での研究成果を、世界に双方向的に発信・受信できる体制を整えると共に、能楽研究所・沖縄文化研究所等とも協力して、国際日本学研究にとって国際的に価値あるコンテンツを整備することを目的としている。この目的にそう形で、今年度もデータの整備・公開に努めてきた

戦略的研究基盤形成支援事業を分担する研究アプローチ１～３を上部構造でまとめるのがアプローチ４であるとすれば、本アプローチは、逆に下でそれらを支えるアプローチ５としての役割を担っている。もちろん戦略的研究基盤形成支援事業を支えるだけではなく、これまで投資して準備してきた設備を有効活用するためにも、本研究所がこれまで成し遂げてきた諸研究の成果に基づくデジタル・データも引き続き維持・増強する役割をも担っている。

データベースは維持されてこそ意味があるからで、今後もこの方針はずっと貫いていく予定である。

なおホームページの情報センターサーバーへの移行にともなって、電子図書館への入口となる URL が変更になったが、データベース本体は従来通り aterui サーバーで稼働している。

2009 年度冒頭の本

サーバー・システム大改造時には、旧デジタルライブラリーの所蔵貴重典籍類の写真群を法政大学図書館のリポジトリへ移管した。その際に、沖縄文化研究所所蔵資料を中心に、タイトル名などの不備を全面的に訂正している。その際のデータ数は、国際日本学研究所所蔵資料 41 件、能楽研究所所蔵資料 92 件、沖縄文化研究所所蔵資料 42 件で、その後、現在に至るまで件数自体に増減はない。

本研究所サーバーにおけるコンテンツとしては、運営開始当初以来、①国際日本学研究に資する、国際日本学研究センターを構成する各研究所（国際日本学研究所・能楽研究所・沖縄文化研究所）の画像類、②研究成果を統合して国際的に活用してもらうためのデータ類、③国際日本学研究を進展させるための研究成果データベース類、④国際日本学研究者自体のデータベース類、の四つを想定し、そのすべてについて公開作業を実施してきた。

またこれらは研究所のサーバー（OS は Windows Server 2003）のシステムとしては、FileMaker 系のデータベースと、NAMAZU 系のデータベースとに分かれる。大まかに言って、画像を含むもの（将来含む可能性のあるもの）が前者、テキストベースのデータが後者となっている。

コンテンツ①については、かつて日立製作所がサーバー内に設置した“Digital Library”というシステムによって公開してきたが、より利用しやすい形に変更するために、あらたに従来公開してきた個別 JPEG 画像を、高精度を保ったまま典籍毎にまとめることのできる PDF ファイル群に変換して 2009 年中に法政大学図書館サーバー内に設置されたリポジトリに移管済みである。

なお能楽研究所所蔵資料については、冒頭部画像付き目録データベースも FileMaker11 をベースに制作したものを、aterui サーバー上で FileMakerServer Advanced11 を用いて変換して別途公開している。

コンテンツ②については、国際研究協力の成果の一つである「在ベルリン・吐魯番漢文世俗文書データベース」を構築、引き続き拡充している（当初の調査資金は小口を代表とする科研費による）。これはベルリン国立図書館やベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー、あるいはベルリン国立アジア美術館などの施設に架蔵されている、中国西域の吐魯番出土の漢文世俗文書断片群を整理して、本来の書名を解明し、さらにはその全文テキストを精細な

画像付で公開しようとするものである。これらの文書調査は吐魯番地域と同じく中国律令制を継受した日本古代史とも深い関係を持ち、さらにドイツとの国際的な協力によって成り立ったもので、国際日本学研究の一つの新しいモデルとなるものである。

これまで画像は権利関係の問題があって公開できずにいたが、現在ではその問題もクリアされ、全点について新たに鮮明な画像を表示させるシステムとして再構築され運営中である。画像が重要な要素になっており、FileMakerベースで作業がなされている。

現在、登録文書数は826点。ただしさらなる拡充のためには、さらに新たな科研費による調査が必要で、現在模索中である。また精密なトレース図や全文デジタルテキストを順次、内部で蓄積しており、新年度には公開に漕ぎ着けるべく作業中である。

コンテンツ③については、日本のなかの異文化の代表的存在である北方史分野を中心に、弥生時代以降、近世にいたるまでの時代を研究した文献を網羅し、柔軟に検索できるシステムを再構築して、それを世界に向けて公開することによって、国際日本学研究の進展に資することができた。さらにそれを拡充し、およそ日本古代史に関わる全ての研究についてのデータベースの構築にも入り、試験公開に成功し、引き続き拡充している。年度末時点での登録データ数は、古代北方史関係研究文献目録データベースが20,682件、中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベースが1,235件、近世アイヌ史関係研究文献目録データベース［試行版］が8,626件、日本古代北方考古学関係研究文献目録データベース［岩手県分･試行版］が313件、日本古代史関係研究文献目録データベース［試行版］が208,057件である。なお既入力の個々のデータについても以前のものを精査して微修正をほどこしている。

これらはすべてNAMAZUベースで作成されている。なお検索のための単語分割にはKAKASHIを用いているが、デフォルトの辞書をそのまま使うか、こちらで用意した歴史的専門用語の辞書を使うかで試行錯誤が続いているが、現時点ではデフォルト辞書で運営中である。

また一昨年度末には新たに、北方世界特有の土器である続縄文土器の、後期のデータベース「後北式・北大式土器を中心とする遺跡・遺構・遺物デー

タベース」を試験的に公開し始めた（左図参照）。まだ実測図の公開許可を得る作業が続いているため、土器の図像自体は一般公開できないが（内部的には実装済）、土器に関する章なデータは十分に公開することができた。現時点では北海道と青森分546件を公開している。また遺跡の分布図も作成して研究の便宜を図っている。

さらに内部の共同研究者のために、冒頭でも触れたように、NAS（Network Attached Storage）によるデータの共有を継続的に実施している。現時点では主にアプローチ1と本電子図書館システムで利用されているが、大量のデータを電子的にここに保管しておくことによって、いつでも過去の研究に遡ることができ、それを踏まえての研究の前進が図られるように工夫されている。たとえば過去の研究会レジュメをすべて電子化して、内部のメンバーで共有したり、巨大な地図データをここにおいて、内部メンバーであれば自由に閲覧して研究素材として活用できるように配慮している。現時点では2010年以降開催の発表資料すべてと収集日本古図の画像20点をアップロードしている。

コンテンツ④については、国際日本学研究に従事している研究者のデータベースを構築することによって、世界のどこにどのような分野を対象としている研究が存在するのかを自由に検索できるようにした。これによって新たな国際協力による研究連携が可能になり、国際日本学研究の進展を促進する準備を整えることができた。データ数は昨年と同様で1560件。ただし件数は同じでも一部細かい改編が継続的になされている。このデータベースもFileMaker11で作成されFileMakerServer Advanced11を通して公開されている。

なおこれらとは別に、一昨年度から3年計画で採択された文部科学省（後に学振へ移管）「国際共同に基づく日本研究推進事業：欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究点」の調査成果を共有するためのデータベースも試験的に世界に向けて公開を開始した。画像を含むのでFileMakerベースで作業しているが、今後の保守を考えて、将来的にはPHPシステムに移管することを検討中である。このデータベースもまた、日本意識解明のための有力な素材を今後とも提供していくことになる。参考までにFilemaker11でのデータベース画面を掲載する。